

【京都府教育委員会教育長賞】

私の家族

舞鶴市立城南中学校 3年 丹生 千絵

みなさんは、「家族」とは、どんなものだと思いますか。

私の家族は、みんな仲の良い家族ですが、一般的な家族と少し違うところがあります。それは、弟が里親制度でやってきた、里子だということです。

弟は、いろいろな事情があって、本当の親と一緒に暮らせなくなったので、4年前、私の家にやってきました。

私は弟が来てから、嬉しいことと辛いことの両方を経験しました。まず、嬉しかったことは、単純に弟が増えたことです。私には、年上の兄と姉しかいなかったのですが、自分が姉になるというのが、少し照れくさかったけど、勉強を教えてあげたり、一緒に遊んだり、今までにはない楽しみが増え、すごく嬉しくなりました。

しかし、この話を聞いて、「そんなにすぐ親しくなることができるのか。」「他人と暮らすのは嫌ではないのか。」という疑問を持つ人もいないのでしょうか。

確かに、親しくなるまでには時間がかかり、たくさんの辛い経験もしました。

両親も、里親として初めての子どもだったので、どう接したらいいのか、たくさん悩みました。しかし、毎日生活していく中で少しずつ慣れてきて、両親も、悪いことは悪い、と叱ることが多くなっていった頃、私は弟とけんかをしました。私が小学校6年生で、弟が小学校1年生でした。私が部屋で宿題をしていたとき、弟は遊んでほしかったのか、何度もちょっかいをかけてきました。「やめて。」と言っては勉強を続けていましたが、その行動はエスカレートするばかりでした。私は、「もういいかげん、やめて。」と、今までにない険しい顔と大きな声で怒りました。弟は、私の剣幕に押され、さびしそうに、部屋の隅にうずくまりました。その声を聞いた母がやってきて、事情を聞き、弟に、「お姉ちゃんの邪魔をしたら、あかん。」と、続けて叱りました。これを聞いた弟は、「お姉ちゃんばかり味方するのは、僕が本当の家族じゃないからやろ。」と、泣きながら言ったのです。その言葉は、私にとって一番のショックでした。

私は本当の姉弟のようにけんかをしているつもりだったのに、弟にとっては、自分だけ家族じゃないから怒られてばかりなのだと傷ついていたのです。

その言葉を聞いて、私は本当に悲しくなりました。それと同時に、一番辛い思いをしているのは弟なのだと、改めて気づかされました。

私はそれから、弟の気持ちを考えるようになりました。そして、普通に家族がいて、自分の居場所があるありがたさに気付くことができました。

ある日、弟が部屋にやってきて、「僕のおどりをを見て。」と言ってきました。話を聞くと、どうやら運動会のおどりを練習したかったようです。最初は見ていただけでしたが、そのうち一緒におどるようになり、気付けば母も隣で一緒におどり、3人で汗だくになっていました。運動会当日、小学校へ母と一緒に弟のおどりを見に行きました。弟は楽しそうにおどりを終え、母と私のもとへやってきて、「間違えた。」と、照れくさそうに言いました。そのまま3人は、木陰で母の作ったおにぎりを食べました。家族の絆を感じる一瞬でした。

私は、親と一緒に暮したくても暮らせない、弟のような子どもがいることを、もっと世の中の人に知ってほしいと思っています。たくさんの人が知れば、もっと家族を大切に思う人が増えると思うからです。

「家族」とはどんなものなのか。家族の形はたくさんありますが、血がつながっているだけが家族なのではありません。血がつながってなくても、毎日一緒に生活する中で、辛いことや嬉しいことを共に経験していけば、家族と呼び合えると、私は信じています。

だから、私の弟の藍は、私たちの「家族」なのです。